説教要旨「あなたはどこに立っていますか」

創世記４章１～１２節

神様との約束を破り、善悪の木の実を食べたアダムとエバは楽園を追放されました。その二人の息子であるカインは、弟アベルを殺害してしまいます。人類の歴史における最初の殺人事件は、全く関係の無い人たちが殺し合ったというものではなく、非常に近しい存在である弟殺しであった。そういうことをこの物語は私たちに知らせてくれています。

神さまが弟の捧げ物に目をとめられたことに嫉妬して、カインはアベルを殺してしまいました。そこで神さまはカインに問いかけます。「お前の弟アベルは、どこにいるのか」（4:9）。アベルがどうなってしまったのかを知らずに聞いているのではありません。神さまは、すべてを承知の上でそう問いかけるのです。それは、取り返しのつかない罪を犯したカインに、自分の罪を見つめさせ、自分がどこに立っているのか自問自答することを促しているのです。

しかし、すっかり拗ねてしまっているカインは、自分がどこに立っているのかを見つめようとしないで、「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」。と、しらをきるのです。その態度に、神さまは怒ります。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる」（4:10）。お前が知らないふりを決め込もうとしても、お前が流した血は土の中から叫んでいる。やってしまったことは消えないのだと。

創世記において、善悪の木の実を食べて楽園を追放された人間が、そうそうに争い始めたことがこのように描かれていることに深い示唆を感じます。自分の正しさばかりを主張し、互いに互いを攻撃しあうことが当たり前に思えるこの社会では、犯してしまった過ちが、大きければ大きいほどに、思わず目をそらしたくなります。都合の悪いことは知らんぷりして、開き直って自分の正しさを主張したくなります。けれどもそんな私たちに、神さまが「あなたはどこにいるのか」と問いかけておられます。自分の罪から目をそらし、人の罪や過ちを裁こうとしてしまうとき、この神様からの問いかけを素直に受け止めることのできるよう、共に祈りましょう。

（２０２１・８・１５　説教者：稲垣真実）